

香川県仏教会
ぶつきょうかがわ

佛教香川

令和の葬送 藤井秀昭
僧侶として生きてきた 和田晃尚
還暦の妄想 山本文匡
教誨～教えさとす～ 片岡妙晶
知に翼をください! 佐長知史
七歩目を歩み出そう 葛西一浄
全日本仏教会 花まつりポスターご案内

佛教香川 38号

2024年8月 発行日
藤井秀昭 発行人
事務局 編集人

香川県仏教会 発行所
〒760-0013
高松市扇町1-26-4 眞行寺

事務局
〒760-0052
高松市瓦町1-13-8 (高善寺内)
087(831)5081 電話
087(831)8899 FAX
kenbutsu48@gmail.com MAIL

還暦の妄想

臨濟宗 妙心寺派 實相寺 山本文匡

平成二十七年に鶴飼秀徳氏の『寺院消滅』が出版されてから丸九年が経ちました。この間、伝統仏教がどう変化したかと言え、コロナ禍を経て葬儀や仏事の簡素化は加速した様に思われますが、妙心寺派に関して言えば大きな変化はありません。ただ新しく和尚になった僧侶は約二割減り、道場で修行中の僧侶も三割以上減りました。令和四年七月末時点で住職の約三割が七十歳以上でしたが、その内の約六割に副住職がいませんでしたので、そうした住職が八十歳、九十歳を迎える十年、二十年後には変化が現れて来ると思います。

しかし、こうした有住寺院数の減少と言うのは、少子化や都市部への人口流出による地方の過疎化、高齢化した核家族の貧困等の影響もありますので、僧侶や教団の力だけでは如何とも

しがたい面があります。諸行は無常ですから受け入れる他ないのでしようが、一つだけ気掛かりなのは日本仏教そのものが消滅してしまうのではないかと危惧です。

中世インドで仏教が消滅した原因にはイスラム教の侵入やヒンズー教の復興等諸説ありますが、仏教自体の変節も指摘されています。仏教は本来出自に依らない筈ですが、チベット仏教の転生ラマ等を見るとヒンズー教の影響を否定出来ません。インド社会に於ける仏教の特徴は反カーストだった筈ですが、それを捨てたが所以にインドではヒンズー教に取り込まれてしまったのかも知れません。

一方、戦後の日本では寺院それぞれが独立した宗教法人になりました。このことが明治以降の肉食妻帯と相まって、寺院の公共性を失わせたと考えます。

私も含め、現代の僧侶は出家者では無く家業を継ぐ者です。今多くの寺院が生き残りをかけて永代供養等の収益事業に乗り出しています。その殆どは資本主義に基づく競争であり、三帰依の和合僧とは程遠いものです。

また今後は外国人労働者の増加と共に宗教も流入するでしょう。最近安価なためキリスト教で葬儀する人も増えていますので、改宗する人が増える可能性もあります。勿論、全く伝統仏教が無くなってしまふことはいりませんが、今のままだと一部の観光寺院と裕福な人達の嗜みとしての先祖供養が残るだけではないでしょうか。現在の伝統仏教が本当に人々を救済しているのか甚だ疑問です。

他方、現代の社会問題、例えば8050問題や認知症患者や障がい者を抱える高齢者世帯の

孤立、児童虐待の増加などは血縁や地縁によるコミュニティが失われたことも一因です。檀家の多い寺院ではそうした問題を抱える世帯も檀家数に比例して多い筈ですが、一ヶ寺だけでは対応出来ません。しかし、多数の寺院が協力すれば、「おてらおやつクラブ」は好例ですが、寺院ネットワークを核として自治体やNPOと協働することも出来そうです。そうした観点からも仏教僧侶の必要性を強く感じるのです。

本来、仏教とは仏法僧の三宝が揃ってはじめて成立するものです。が、残念ながら各寺院が独立する現在の教団は僧伽とは言えません。もしも宗派の行政区や地域仏教会がホールディングスとなり、資金と人材を共有出来れば、社会問題の解決に寄与しつつ相互扶助することも可能ではないかと妄想しますが、その為には先ず僧侶自らが既得権を手放す必要があります。それが帰依僧ということでしょう。



高齢者の世帯状況—内閣府 令和5年版「高齢社会白書」より

65歳以上の者がいる世帯について見ると、令和3年現在、世帯数は2,580万9千世帯と、全世帯(5,191万4千世帯)の49.7%、約半数を占めている。昭和55年では世帯構造の中で三世帯世帯の割合が一番多く、全体の半数を占めていたが、令和3年では夫婦のみの世帯及び単身世帯がそれぞれ3割を占めている。

65歳以上の者がいる世帯数及び構成割合（世帯構造別）と全世帯に占める65歳以上の者がいる世帯の割合

